ぴーちっこ

発行　社会福祉法人　聖友ホーム
聖友乳児院（乳児院）
聖友学園（児童養護施設）

学園　乳児院

施設改築に向けて施設を全てグループホーム化

～ 合築事業に向けての展望と報告 その④

2022年12月予定の施設改築にむけた工事着工に伴い、児童養護施設聖友学園はそれまでに全ホームをグループホーム（地域にある一軒家ないしマンションを借り、子どもが生活する場所。以下GH）にしていきます。これまで学園は本園4ホーム（子ども定員28人）、GH4ホーム（同24人）の合計8ホーム（同52人）で運営してきましたが、2022年7月までにGH9ホーム（同48人）として、しばらく運営をしていくこととなります（**下図参照**）。

これまで、児童養護施設のGHの子どもの定員は6人となっていましたが、現在は4人のGHも認められています。それでも子どもたちの部屋を確保し、職員の当直スペースも必要だということで、相応の部屋数や広さが求められ、物件を探すことはなかなか難しい状況でした。今回はお付き合いのある不動産業者の方にご尽力いただきながら、新たに5件契約することができ一安心です。その他、主に心理職員が使用するスペースは確保しており、残るは事務所スペースを借りるのみです。

ただし今回、本園施設が一時なくなることに対し、私は大きな不安を抱いています。その不安というのは、これまでであれば、何かGHで問題が発生しても、本園に応援を依頼すれば誰かしらがかけつけられましたが、今後はそういった対応がこれまで通りできるのか、というものです。

本来であれば『児童養護施設の小規模化・地域分散化は、同時並行して本体施設に多様な支援機能を拡充・統合するという、本体施設による総合的な支援体制づくりが大前提』となっているのですが、この前提部分が基本的にない状況になってしまうのです。今後は、職員が対応に困った際、定期的に相談できる場やすぐに相談できる人を決めておき、コミュニケーション不足による孤立や不安を防いでいきたいと考えています。これからも職員がより良く成長していけるよう、職員個々の資質向上と、施設全体の専門性の向上を目指していきます。また、組織力を向上させるために、職場環境を改善し、働きやすく魅力ある職場をつくる努力も惜しみません。

聖友学園長　若松 弘樹

聖友学園の取り組み

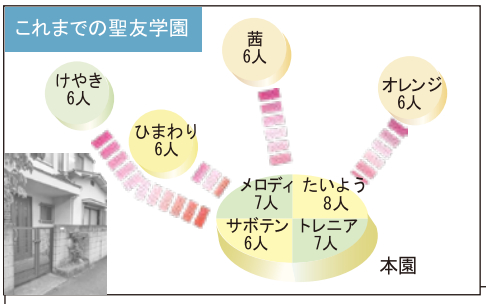
★大丈夫コール　⇒　夜間一段落したところで、GH間で電話連絡を行い、職員間でコミュニケーションをとりながら、一日の報告や対応の相談などを行う。

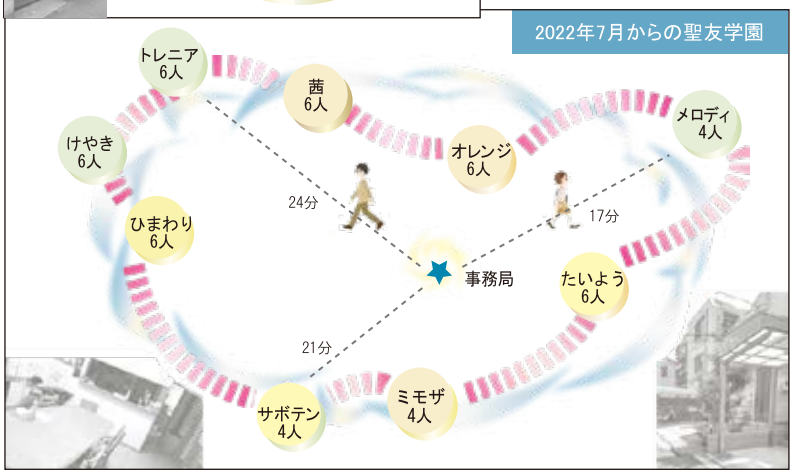
★待機宿直　⇒　夜間に有事があった際、かけつけられる職員がいなくなってしまったため、近隣の職員であれば自宅にて、そうでない職員は心理職員が使用するスペース等で夜間待機を行い、連絡を受けた時はそのホームに出向けるような体制をとっておく。

★職場内研修　⇒　職員個々の支援力や、チームとしての組織力を向上させるための、職場内研修（経験年数毎に階層別チームに分け、一つ下の階層に対し研修の企画運営を行う）を実施する。

★新任職員育成　⇒　主任の一つ下の階層別チームを、聖友学園の人材対策チームと位置づけ、新任職員の人材育成を担っていってもらう。

★相談窓口　⇒　改築中は本体施設がなくなってしまうことを考慮し、職員の想いを聞く場（例：園内相談窓口）を作るべく、体制整備していく。





不安だった グループホームへの 引っ越しを経て思う 学園との未来

たいようホームは、今まで本園で長い期間過ごしていた子どもが多いことに加え、引っ越し自体が初体験だったので、イメージが湧かずに不安を抱える子どももいました。最初はソワソワしていた子どもたちも、引っ越しから数ヶ月が経ち、少しずつグループホームでの生活に慣れてきました。

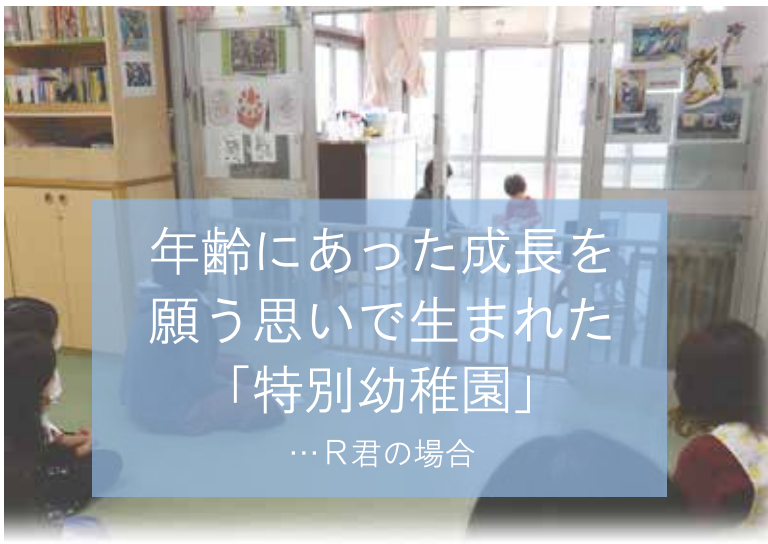
住宅が密接している地域だということもあり、今まで以上に声のボリュームやホームでの遊び方に気をつけて、落ち着いて過ごせるように心がけて支援しています。

本園にいたときは、厨房で調理さんが作ってくださっていた食事も、全てホームで作るようになりました。食材の買い物や調理に興味を持ち、意欲的に手伝ってくれる子も増えました。「これ私がつくったんだよ！美味しくできたよ」と言う子もいて、苦手なものでも自分たちが作ったものなら美味しそうに食べている姿を見ると、こちらまで暖かい気持ちになります。

いいこともたくさんある反面、今まではすぐ隣に別のホームがあって、1階からは元気な男の子たちの声が聞こえてきて、という環境で過ごしていたので、他のホームの子どもたちの元気な顔がすぐ見られないことに、寂しい気持ちにもなります。また、夜間は1人での勤務の為、何かあった時の不安や孤立感もあります。しかし私が思う聖友学園の良さでもある、何かあった際に相談のできる暖かい環境に助けられています。

これからも全職員で一致団結して、子どもたちが安心して生活のできる温もりのあるホームを目指し、頑張っていきます。

聖友学園 児童指導員　手塚　茉鈴



年齢にあった成長を願う思いで生まれた「特別幼稚園」

…Ｒ君の場合

Ｒ君は０歳６ヶ月の時に入所し、ちょうど３歳になる頃、私はＲ君の３人目の担当（※1）になりました。

Ｒ君は、１歳後半でやっと言葉が出るなど、発達は緩やかでした。また、過敏なところやこだわりが強いところもあり、クラス（※2）で情報共有しながら養育をしていきました。

入所当初は、母子面会もありましたが次第に滞り、２歳の後半から約１年間はフレンド交流（※3）、４歳になる少し前から約８か月間は里親交流をしました。里親交流は、Ｒ君と里親さんの様子を見ながら、時間をかけて進めていきましたが、里親委託に向けた長期外泊期間中に、残念ながら里親さんの不適切な対応により乳児院に帰ってくることとなりました。

乳児院に戻ったＲ君

帰院したＲくんは、「会いたかったよー」とみんなに声を掛け、安心している様子もありましたが、日が経つにつれ里親さんに会いたい気持ちや、里親宅へ戻りたい気持ちを話し始めました。ようやく手に入れた自分だけの居場所が無くなり、かなりの不安やストレスがあったと思います。また、多くの子どもたちが3歳以下である中、４歳のＲ君にとって、乳児院の生活は物足りず、里親宅での楽しかった日々が思い出され、次第に情緒の乱れも出てきました。

Ｒ君のために何ができるのか、院全体で話し合い、たくさんの意見が出ました。共通しているのはＲ君が少しでも楽しく、年齢に合った、

成長出来るような活動をさせてあげたいというみんなの思いでした。そこで、その対応の1つとして、本来幼稚園に通園可能な年齢であるＲ君に対する個別活動として当院内における「特別幼稚園」が実施されることになりました。

モンテッソーリ教育

特別幼稚園は、国際・国内の資格保有職員によるモンテッソーリ教育の時間と、大学付属幼稚園での教員経験がある職員による文字の勉強の時間で構成されました。モンテッソーリ教育は、イタリア初の女性医学博士である、マリア・モンテッソーリが考案した教育法で、「子どもには自分を育てる力がある」「子どもが一人でできるように手伝う」「感覚体験があらゆる教育の基礎にある」という考えをもとに、子どもが自分で課題に取り組み、結果を導き出すプロセスを重視した教育法です。

特別幼稚園の最終の目標としては、「落ち着いた心持ちで、４５分間着席し課題に取り組む」こと。「幼稚園という日常に無い高月齢　児設定の中で、きちんと挨拶や出席シールなどを活動に組み込み自尊心を養う」こともねらいとしました。初めは、やる気が出ない事もありましたが、気に入った内容をうまく取り入れていくことで、集中できる時間が増え、最終的には４５分以上座ってお勉強が出来るようになりました。

最終回は、授業参観（発表会）として多くの職員に見守られ、縫いさし、字を書く姿を披露し、緊張しながらも集中して取り組む姿に大きな成長を感じました。Ｒ君は、みんなからたくさん褒められ、嬉しそうな、恥ずかしそうな表情をしていました。

特別幼稚園と並行して、クラス内でも担当との個別の活動に時間を割いたり、日々の活動の充実を図り、好きな電車を見たり、自転車練習、高月齢児用の玩具も取り入れ、少しずつＲ君の情緒は落ち着いていきました。

そして、Ｒ君は５歳を迎えた数か月後に児童養護施設に生活基盤を移すこととなりました。寂しさを口にしながらも、「お兄さんのお家」

（※4）に行けることを楽しみにしており、お友達や職員にしっかりとお別れをして出発しました。移る前に、アルバムを一緒に振り返ると、職員との写真を見ながら「ねもちゃんとなみちゃんと一緒にお泊り行ったのが楽しかった」「則さんとまた電車見に行きたい！」と職員1人1人との記憶を細かな部分まで忘れることのない思い出として話してくれ、たくさんの職員に大切に接してもらっていたことを改めて感じました。Ｒ君は、児童養護施設で生活している現在も担当や乳児院のことを忘れずに話してくれているそうです。

担当として悩むことも多かったですが、たくさんの職員に支えられ、無事に送り出す事が出来ました。何より、何度も別れや辛い思いをしながらも、可愛らしく、たくましく成長してくれたＲ君に感謝しています。また、Ｒ君の幸せを心から願っています。

聖友乳児院　保育士　仲西　理恵

※1　担当
乳児院は「愛着」の構築に重きをおいているため、養育担当制をとっているところが多い。当院も基本、児童1～2名に対し1名の職員を担当とした体制を組んでいます。

※2　クラス
子どもたちが日々生活するクラスは、当院の場合2クラスに分かれています。現在は1クラス定員20名～22名の男女混合・縦割りの養育体制となっています。

※3　フレンド交流
フレンドホームとの交流。施設（児童養護施設や乳児院など）で生活する様々な事情により家庭で生活できない子どもたちに対し、学校が休みの期間などに、面会・外出・外泊等家庭生活を体験させていただく制度。

※4　お兄さんのお家
児童福祉法では原則0～2歳までは乳児院。2歳～18歳までは児童養護施設にて受け入れを行っています。乳児院では成長発達やハード面を考慮し、概ね0歳～4歳未満の子どもたちが多く生活しています。

職員エッセイ

少しの時間でも笑顔でいてほしい

ある日、クラス職員の依頼で壊れてしまったベットの柵を直したところ、大変喜んでいただきました。それ以来、次々と修理の依頼が入るようになり、昨年度からルーティンワークの一部として修繕を任されるようになりました。大型のカーテンレールを天井に設置したり、水漏れする手洗い場の痩せたタイルの溝にセメントを流し込んだり、詰まった流しを直したりと大小様々な修繕を行ってきました。

古い施設ということもあり、ドアの木枠や蝶番やドアノブ、子どもたちがつかむ可動式の柵など、いろいろな場所の劣化が進んでいます。他の施設では専門の修理業者へ依頼することが多いと思いますが、私が一度確認して、自分で直せそうなものはなるべく直すことで、本来は高額な修理代を半分以下に抑えて修理する事ができるようになりました。

保育士さんや相談員さんと違い、直接子どもと関わる業務ではないのですが、間接的に子どもたちと関わり安心して過ごしてもらえるよう、依頼された業務を精一杯取り組んでいます。

◆送迎業務について

乳児院の勤務が始まり約２年して日本に新型コロナウイルスがやってきました。聖友乳児院では感染予防の観点から公共交通機関は一切使わず、乳児院の公用車にて通院や検診、関係各所への通所を行うようになりました。デイサービスにて１日約４時間、登録者120名の送迎をこなしていた私は、運転手として送迎を任されるようになりました。子どもたちを不安にさせないために事前にコミュニケーションをとり、″知らない怖いおじさん″と思われないように、安心と安全の運転を心がけています。

◆子どもたちに対して思う事

私の家庭は決して裕福とは言えず、お酒に飲まれ、暴れる父がいる家庭に育ちました。家庭に温かみが無い環境で育ち、ほかの子どもたちには自分と同じ目にあってほしくないと心から思います。

今までそんな思いを胸に生きてきた私の目の前には、何のご縁か子どもたちがたくさんいます。間接的ではありますが、この子たちの笑顔を自分の携わる事で守りたい、そう思って日々働いています。今でも子どもたちが泣いている姿は心がギュッと締め付けられるような感覚があり、幼き日の自分と重なって見えてしまい、何とかしてあげたいと思ってしまいます。

子どもたちにこの思いが伝わらずとも、今一瞬、この少しの時間でも笑顔でいてほしいと願っています。

聖友乳児院 用務員　嘉手苅　雅人

8月には ホームページが 更新されま～す

社会福祉法人聖友ホームのホームページは、これまでご評価いただく面もあったのですが、更なる高みを目指しこの度改装することとなりました。現在は、他の児童養護施設のホームページ作成で実績のある、NPO法人チャイボラにご協力いただきながら、新たなものを鋭意作成中です。コロナ禍ということで、打ち合わせはこれまで全てオンラインで行ってきていますが、都度状況共有や意見交換をしながら、どのように作成したらみなさんに見やすい情報をお届けできるか検討しています。2022年の夏にリニューアルする予定ですので、それまでお待ちください。

発行　社会福祉法人 聖友ホーム
法人本部　TEL 03-3336-9830 FAX 03-3338-4679
聖友乳児院　TEL 03-3338-1849 FAX 03-3338-4679
聖友学園　TEL 03-3338-1844 FAX 03-3338-1894
〒166-0001
東京都杉並区阿佐谷北3-28-19
Eメール　sasaetai@seiyuhome.org　ホームページ　https://www.seiyuhomu.or.jp/